

## 令和元年度 大阪国税局長賞

税も積もれば夢となる

奈良市立都跡中学校 三年 藤村 夏希

私達には「納税の義務」がある。納めた税金は私達の生活になくてはならないものへと姿をかえて、豊かで安心した暮らしを支えてくれている。知ってはいたが、あたり前と思ってしまう、むしろこんなにも税金を納める必要があるのかと思ってしまっていた。

そんな時、私の考えを変える出来事が起こった。夏休みのある暑い日のこと、私の弟が気分を悪くして倒れてしまった。父と母が慌てて救急車を呼び、すぐに病院で手当てを受けられたため大事には至らなかったが、もしも手当てが遅れていたらと思うと、今でも恐くてたまらない。救急車を公的サービスとして躊躇わずに利用して、支払いをしなくても病院へと運ぶことができた速やかな行動が、大げさに思われるかもしれないが、弟の命を救ったと私は思っている。「税金」が「救命」へと姿をかえたのだ。

この出来事を経験した私は、今回の税の作文を書くことになったとき、税金が「救命」へと姿をかえたように、他にも身近にあるのではないかと思い、奈良県の税について調べてみた。その中で、二つの税が私の目に止まった。一つ目は、「自動車税」だ。この中でも、私が注目した言葉は「軽課・重課」だ。これは、地球環境にやさしい自動車の普及をすすめるためのもので、環境にやさしい車へは税を軽く、逆に負荷が大きな車には税を重くする取り組みである。この取り組みが広がれば、排出されるCO<sub>2</sub>が減り、そうすれば地球温暖化を抑制できる。「税金」が「抑制」に姿を変えることができるのだ。二つ目は、「森林環境税」だ。森林と税に関係はあるのだろうかと思ったが、税の使い道を知り納得した。例えば、森林の整備。この前の西日本豪雨では土砂災害が大きな問題となっていたが、実は森林を整備することで、植物の根や落ち葉が絡まり、土砂の流出や崩壊を防いだり、森林の土壌が水をよく染みこませて、河川の急激な増水を防いだりできるのだ。つまり「税金」は「減災」へと姿をかえるのだ。さらに使い道として、森林生態系の保全もある。動物や植物など数多くの生きものに住み処を与えるだけでなく、その豊かな自然に私達の心に潤いや活力をくれるのだ。「税金」は「共生」へと姿をかえることもできるのである。

「税金」は「救命」「抑制」「減災」「共生」と姿をかえて私達の生活を支えてくれている。人の命を救うことも、環境を守ることも、地球温暖化を抑制することも直接的にしようと思えばとても難しい。だが、納税することで「税」という形で間接的に多くの人々と協力できれば、決して難しい問題ではなくなると思う。私は、税によってある今の暮らしがあたり前ではなく、多くの人々の思いが姿をかえたものとして大切に守っていかなければならないと実感し、私も「税」を通して未来を造る一人になりたいと思う。